

TS転生したら薙切えりなの双子の姉になっていたお話

スーパマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生したら薙切えりなの双子の姉になっていた。
妹のような神の舌とか持っていないけど、努力して彼女を笑顔に出来るような料理人になってみせる。

これは、薙切えりなの姉となった転生者の物語。
※主人公には原作知識はありません。

目次

難切えりなの双子の姉	1
ミートマスター	11
宿泊研修 その1	21
パーフェクトトレース	32

薙切えりなの双子の姉

『そう言わずに、編入試験を受けに来て貰えんかのう』

「私は薙切の落ちこぼれなんだろう？ 弱者は要らないっていうのが、薙切家の方針じゃなかったのかな？」

——ある日、目が覚めると女の子になっていた。

嘘みたいな本当の話だ。

調理師の資格を取った私はなんやかんやあつて死んでしまう。

そして、起きたら女の子になっていたんだからびっくり。

しかも、何か凄く良い家柄だったみたいで、お姫様みたいな扱いを受けて育った。

電話の先の男は薙切仙左衛門という名前で私の祖父である。

彼は日本の料理界を牛耳る食の魔王と呼ばれており、畏怖されていた。

祖父のことは嫌いだ。

才能の無い子を切り捨てるような歪んだ料理学校——遠月学園を作り、1%の玉を作るために99%を見捨てるという方針は私のような一般人からすれば到底受け入れられないし、気に食わなかった。

その上、妹のえりなをみすみすあの男に預けて歪ませたし……。

そう、私には双子の可愛い妹がいる。名前を薙切えりなと言って、私と瓜二つの容姿をしている。

だからといって私が可愛いというわけではないが。

彼女は「神の舌」という絶対的な味覚を持つっており、それが原因で特殊な教育を父から受けて「自分の認めなかった料理は全てゴミ」だという歪んだ心を持つようになってしまった。

幸いえりなは私に懐いてくれたし、お姉様と慕ってくれてる。

正直に言つて可愛くて仕方ない。もう、目に入れても痛くないくらい。

『えりなを変えることが出来るとするならば、それは真の料理人のみ。玲奈^{れいな}、お前が妹を救いたいと想うことは知っておるし、才能もある。じゃから、えりなの近くで——』

祖父は妹のえりなを元に戻すには真の料理人しかいないと断ずる。その気持ちは私も悔しいけど同じ。

だからこそ、学校でのんびり料理を勉強なんてしてられなかった。世界中を回ってひたすら鍋を振って修行することに決めたのだ。

ちなみにこの電話は現在、イタリアで受けている。それ以外ではフランスやトルコ、それから中国……あと、インドにいたりした。

——私にはえりなのような神の舌という大いなる才能はない。

そのおかげで父にも祖父にも相手にされず比較的に自由にさせられてきたんだけど……。

『玲奈^{れいな}、お前のことを落ちこぼれだとは思おうとらん。えりなを変えることが出来る可能性がある」とワシは信じとる。3年ぶりに可愛い妹に会いに行つてやれんか?』

調子の良いことを言うなあ。

私が海外でそれなりに評価されるようになったからって。

でも、正直に言つてめっちゃめっちゃ妹には会いたい。

3年間、ずっと我慢してきたし。あの子も家族がバラバラになつて寂しい気持ちにさせたかもしれないから……。

「しょうがない。でも、私が何をすると言つても後悔しなくてももらえるかい?」

『おおつ! 来てくれるか! わかつた。待つておるぞ!』

祖父はテンションを上げて電話を切る。

本当に後悔したらダメだからね。私がどんなやり方をするのか聞かなくて良かったのかな……?」

それにしても、日本かあ。久しぶりだなあ……。

祖父との電話を終えて……私こと、^{れいな}「薙切玲奈」は遠月学園の編入試験を受けることを決意した。



「さあ、^{ゆきひら}風ふりかけご飯。美味いか、不味いか言つてみな!」

「不味いわよ！」

「え〜!?」

しまったなあ。時差ボケで遅刻してしまった。

へえ〜。男の子が一人、すでに編入試験を受けてるみたいだね。

そして、えりなが試験官かあ。随分と大人っぽくなったなあ……。

本当にスタイルなんて同じ15歳だと思えないくらい育ってるし……。

それにしても、あの料理が不味いつて——。

「えりな、それはちよつと厳しいんじゃないかな？ 煮ごごりが良いアクセントになって、かなり美味しく仕上がってると思うけど」

「気安いわね。私を呼び捨てにするなんて——。——っ!? れ、玲奈

お姉様!?! いつ帰国されたのですか!?!」

「ふふつ、久しぶりだね。元気にしてた？ おっと」

「もう、一言連絡をくれれば迎えに伺いましたのに……」

えりなは不機嫌そうな顔で振り向いたが、私の顔を見るなりびっくりした表情になる。

そして、私に駆け寄り力強く抱きしめてきた——。

か、可愛いけど、何か意識しちゃうな。何か凄くいい匂いするし……。

「元気にしてた……では、ありません。3年間もずっと海外で過ごしていたお姉様が一体なぜこちらに？」

「ああ、あの爺さんに頼まれたんだ。この学園の編入試験を受けろつて。寝坊して遅刻しちゃうたけど」

「相変わらずだらしないですわね……。編入試験は、その——」

「卵料理でえりなに美味しいって言わせれば良いんでしょ？ そつちの男の子みたいに合格してみせるさ」

手ぬぐい巻いてる男の子が作ったメニューから大体えりなの出したお題は想像出来た。

制限時間以内に卵料理を作って美味しいと認めさせる——あの男の子しか試験を受けてないところを見ると、他の子はえりなを恐れて逃げたのだろう。

「へえ、あんだ。あっちの薙切の姉ちゃんか。すげー、似てんなー。双子か？」

「そうそう。私があの子のお姉ちゃんなんだ。どういうわけか髪の毛が真っ黒になっちゃったけどね。君、いい腕してるじゃないか。このふりかけご飯っていうの？ とても美味しく出来てる。えりなも悔しがってるけど、認めてるはずだよ。きつと」

彼のような料理人が受験に来ているとは思わなかった。

なるほど、なるほど。見れば見るほどいい腕の料理人だ。

合格させなきや、おかしいつてくらの。

「おー、あんがとな。でもさ、食べてもないのに何で俺の品が美味いつて分かるんだよ？」

「んー、ちよつと味を想像しただけよ。食べなくても、それがどんな味なのか私には大体分かるんだ」

そう。私には味見をする必要ない。

経験に裏打ちされた想像力は料理を観察するだけでどんな味なのかかなり正確に予測することが出来るようになったからだ。

私にはえりなのような天性の才能はない。だからこそ、鍋を握れない時間すら惜しかった。

そんな私は想像の世界で料理をする方法を伸ばす。

シャドーボックスングのように頭の中で食材や調味料、そして調理器具を正確に再現してイメージをリアルに近付けてトレーニングを積んだのである。

それを繰り返しているうちにいつからか……料理を観察するだけで自分の味覚で感じる以上に正確に味を把握することが出来るようになった。

所謂、味覚センサーのようなものが私の頭の中に宿ったのである。

さすがに隠し味とか、繊細なのは分からないから……神の舌には遠く及ばないけどね。

あくまでも美味いか不味いか、おおよその判定をするくらいだから……。

「へえ〜。お前がどんな料理を作るのか見てみてえな。とりあえず、

俺は合格で良いんだな？」

「うん。良いよ〜」

「ダメに決まっています！ お姉様、勝手なことを仰らないでください！」

あれ？ やっぱりダメっぽいかな。

この子も頑固なんだから……まったく。

「緋沙子ちゃん、これがあの子の受験票かい？」

「は、はい。玲奈様……！ そ、その、お久しぶりです……」

「はは、君も固いねえ。昔と変わらさず……。なるほど、幸平創真くんか。定食屋の息子さんなのかあ。こりや、えりなとは反りが合わないわけだ」

私が声をかけたのは新戸緋沙子ちゃん。新戸家は代々……薙切家に仕えてるらしく、彼女には幼少の時から色々と世話を焼いてもらってきた。

それにしても定食屋か。ロイヤリティというか、上流階級とかか、そんな人たちが多く進学するこの遠月学園で庶民的なお店の子が試験を受けるのは珍しい。

この子……多分、あの祖父の差し金だろう。ちよつと調べてみる必要があるかもしれないな。

「じゃあ、えりな。私と賭けをしないか？」

「か、賭け……ですか？ その手にはどういう意味があるのでしょうか？」

私は手をパーに開いて、えりなに賭けを持ちかける。

この手の意味は時間。つまり、私は――。

「5分……でいいかな。遅刻して来ちゃったし。私の調理時間は全部で5分でいい。それで、君に美味しいと言わせることが出来たら、私に免じて幸平くんを合格にしてくれないかな？」

「た、たったの5分でえりな様から合格を！ 玲奈様！ それは、いくらなんでも――」

「……お姉様、冗談では済みませんよ」

「冗談なら、もうちよつとセンスのある冗談にするさ。私は、本気も本気

だから」

私はえりなに調理時間を5分だけ要求する。

それで彼女から合格が貰えればついでに幸平くんも合格させて欲しいと交換条件を出した。

幸平創真——私の勘が正しいなら彼はきつと計画の役に立つ……。

「いいでしょう。お姉様が合格すれば、私も意見を曲げましょう。しかし、雑な料理を出せば……いくらお姉様でも許しませんから」

「あはは、えりなに料理を作ってあげるのは久しぶりだね。半端な皿は出さないから——安心してくれ」

「——っ!?!」

私は包丁を握り調理を開始した。

精神を研ぎ澄ませて、想像から創造へ——。

機械以上に精密に、そして早く——。

「うおっ！ 早いなく。雍切の姉ちゃん。お前もあれくらい早いのか？」

「気安く話しかけないで下さる？ 玲奈お姉様……海外に行く前と全

然気迫が違う——」

「繊細にして、豪胆……。世界で料理修行をしていたと聞いていたが……」

才能が足りない分は手数で補ってきた。

えりな……君に美味いと笑って欲しい。

——それが私が包丁を握る理由だから。

君の為なら私は食の魔王にだって、立ち向かおう。

「しかし、何を作るのでしょうか？ えりな様を唸らせるような卵料理……」

「あの、料理は——。お姉様、まさか……」

「おー！ 卵焼きか！ 卵料理といえばって感じのメニューだぜ」

幸平くんの言うとおり、私は卵料理の超定番メニューである卵焼きを作った。

時間もかけられないから、シンプルなレシピが都合が良かったし

……。

「召し上がれ。これが私の卵料理だ。試食してくれ」

「5分ジャスト……。調理時間は予告ピッタリです」

私は出来上がった卵焼きを扇状に切って、3人に皿に乗せて出す。せつかくだし、緋沙子ちゃんや幸平くんにも食べて貰おう。

「こ、これは『フリッタータ』——イタリア風のいわゆる卵焼き。お姉様が調理してる様子から予測出来ましたが……」

「うん。イタリアではこうやって野菜などの具材をキッシュみたいに混ぜて卵焼きを作るんだ。旬の春野菜を贅沢に使わせてもらった」

えりなの言うとおおり、私はイタリアの定番卵料理——フリッタータを作った。

新タマネギやセロリなどを使って、ハーブで風味を強めた自信作だ。

「これをたったの5分で……。？ 信じられん……」

「これだけじゃないよ。緋沙子ちゃん」

「えっ？」

「ただ、フリッタータを作るだけじゃ面白くないでしょ？ だから、これをかけて食べてみてくれ」

私は別の鍋で作っておいた餡をフリッタータにかけた。

これがこの卵焼きの味をさらに高める。

「この餡は……。中華風の餡ですね。これはイタリア料理なのに……。はむっ……」

えりなは餡がかかったフリッタータをナイフで切り取り、しばらくそれを眺め……。口にした。

そして、残りの二人も——。

「はむっ……。——っ!？」

私のフリッタータ——イタリア風の卵焼きを食す。

美味しく出来てる自信はあるけど、やっぱり人に食べてもらうのってそれなりに緊張するよね……。

「新鮮な春野菜の素材の風味が凝縮されていて、卵と絡み合って味の深みが増している。短い時間の調理だからこそ、野菜本来の旨味が逃

げ出さずに閉じ込められているんだ」

「それだけじゃねえ。卵のフワツとした食感と野菜のシャキツとした心地よい歯ごたえが凄えマツチして、一口食べるごとに食欲が増すんだ。早いだけじゃないってことか……」

緋沙子ちゃんと幸平くんが口にしたことはまさに私が意識したポイントかな。

素材の良さを100パーセント以上に引き出して、さらに食感を楽しんで貰えれば、必然的にその皿の力は限界以上に引き出せる。

これは私が料理をする上での特に気を配っていることだ。

「驚くべきは、この餡……。こんなにも具材が多いとクドくなってしまうって、台無しにしてしまっただけ。これは後味もさっぱりしていて、素材の風味をしっかりと感じるようになってる」

「えりなのことだから、その理由も分かっているんだろ？」

「ええ。お姉様、この餡に使った隠し味はレモンですね。レモンを絞ることで中華料理とイタリア料理を繋ぐことに成功しています。こうすることで、普通のフリッタータと比べてより豊かで強い味付けを楽しむことが……。——な、何ですか？ 私の顔に何か？」

見事に隠し味とその狙いを看破するえりなの鋭敏な味覚に感服しつつ、私は彼女が久しぶりに美味しそうに食べる顔を見ることが出来て嬉しいと思っていたのである。

「いや、合格出来たのかなあって。えりなが意地を張らなきや大丈夫だと思っっているけどさ」

「……………」合格です。——お姉様、狡いですわ。私がかうなるって分かっていて賭けを持ちかけるなんて。私が意地を張って、お姉様まで不合格に出来るはずないじゃないですか」

「あはは、だつてさ。良かったな、幸平くん。君も合格だ」

「……………」

えりなから合格をもらって、必然的に一緒に編入試験が合格となった幸平くんに声をかけると、彼はブスつとしたむくれた表情をしていた。

いや、どうしたんだらう？ 合格が嬉しくないのかな……？

「いや、なんつーか。俺はあいつに美味いって言わせたかったのに、おこぼれで合格したんじや納得いかねーつかさ」

あー、思ったよりも料理人としてのプライドが高い子なのか。男の子だな。誰よりも負けず嫌いって顔をしている。

「小さいことを気にするな。入学しちゃえば、えりなに美味いって言わせるチャンスはいくらでもあるんだから。素直に合格を喜びなよ」
「でもさー、薙切の姉ちゃんの料理……美味かったし。やっぱ、悔しいぜ」

こうして、幸平くんと二人だけで挑んだ遠月学園高等部への編入試験は終了した。

これで私も今日から遠月学園の生徒ってことになる。あまり嬉しくないけど……。

だけど、えりなと久しぶりに一緒に屋根の下で生活出来るのは嬉しい。

この生活だけは絶対に守りたいと思っている――。



そして、迎えた遠月学園の始業式。

うちの祖父が玉を指せとか何やら演説して、幸平くんが「全員踏み台」とか「頂点目指す」とか挨拶していた。

へえ、幸平くんはそういうタイプか。なるほどね……。

「おーい。薙切の姉ちゃん。お前にも負けねーからな」

「そうだね。遠月の生徒の頂点は君に譲ってあげてもいい」

「えっ?」

幸平くんの返答を待たずして、私は壇上を目指して歩き出した。

さて、私の所信表明演説でもするか。

「私は特に最強の料理人とかそういうのは、興味無いんだけど。欲しいものならあるんだよね。……それは食の魔王である我が祖父……」

薙切仙左衛門の座っている席だ。つまり、この学園の総帥の座を私は手に入れたい」

「——っ!?!」

「ということで、差し当たっては十傑評議会の席の過半数を私の手の内に収めたいと思う。そこで……我こそはと思う者は私に付いてこい。十傑の称号をくれてやる」

私は高らかに総帥の座を貰うと宣言した。

この学園ってちよつと特殊で十傑という学園で頂点に立つ十人の料理人たちが絶大な権力を持っている。

その十傑の過半数の支持を得られれば、総帥にだってなれるくらいの——。

とどのつまり、私の目的はまさにそれ。

薙切仙左衛門から、総帥の座を手に入れて……妹のえりなを薙切の血の運命から解放すること。

そして、この学園を健全な姿にすることである。

「いきなり孫から宣戦布告されるとは思わなんだ」

「首を洗ってまっついろ。クソジジイ……」

私と祖父は一瞬だけ睨み合い……すれ違う。

この日、私は遠月学園で食の魔王に喧嘩を売った愚か者だと認知されるようになった——。

ミートマスター

「お姉様！ 一体、あれは何のおつもりですか！ 学園の総帥になりたいだなんて……、お祖父様に喧嘩を売るような真似をどうして？」
始業式の日の夜——私は妹のえりなの部屋で彼女に叱られた。
編入生の挨拶が過激だったとのことだ。
もちろん、わざとである。

デモンストレーションは派手にしておくにこしたことはない。

味方も敵もこうすれば近付き易くなっただろうし。
「どうしても、こうしても無いさ。私はこの学園が嫌いなんだよ。ちよつと努力の開花が遅れただけで、その人の尊厳そのものが踏みにじられるようなシステム。そもそも退学者が9割なんて学校が常識的に考えて健全であろうはずがない。ならば、それを変えてやろうと思うのが身内としての義務じゃないか」

「……遠月学園そのものを否定なさるのですね。しかし、この厳しいやり方だったからこそ、真の美食へと研磨を進める料理人たちが数多く生まれたではありませんか？」

真の美食ねえ……。

確かにえりなの言うとおり、この超競争スパルタ方式で優れた料理人が生まれたことは認めよう。

ていうか……あれだけやれば、一人や二人……優秀な料理人が誕生しない方がおかしい。

「そうだね。えりなの言うことも分かるよ。でもさ、その裏で開花しようとしてる芽を踏み潰しているのは見過ごせない。一度や二度の失敗でね」

「お姉様がそんなところで躓くような程度の愚図に手を差し伸べる必要はないと思います」

「大器晩成って人間もいる。失敗を繰り返して成長する人だっている。——えりな、少しばかり遅れを取っているからって、人を見下すような言い方をしては駄目だよ。お姉ちゃん、そういうのは嫌いだな」

「す、すみません。ちょっとはしたない言い方をしてしまいました」
失敗で落とされる程度ならまだ良い。

この学園は料理が上手いってだけで、他者を蹂躪するようなことが
まかり通る。

行き過ぎた選民思想は虚栄心を育み……そして、他者を蹴落とすこ
とだけを考えて……生徒たちが足の引つ張り合いをするという本末
転倒を迎えた例も少なくない。

「いや、私も少々言い過ぎた。えりなは悪くないよ。こんな環境にい
たら、そういう考え方をしてしまうのは無理もない」

「お姉様はえりなをお嫌いになられたのですか？」

「馬鹿だな。私がえりなを嫌いになどなるはずないじゃないか。帰っ
てきたからには君からもう離れたりはしないよ。ずっと一緒にいる
から」

急に涙目で上目遣いになられると結構来るものがあるな……。

私はえりなの頭を撫でて、これからは側にいることを伝える。

大丈夫、心配するな。この学園の十傑の席を譲ってもらうために私
は力をつけた。

「ずっと一緒に……ですか？ 本当なら嬉しい。お姉様が海外に行っ
てしまわれて、えりなは寂しい思いをしていましたから」

「ごめん。もう、そんな思いはさせないし。それに——」

雑切家だとか、神の舌だとか、そんなくだらない重圧からも解放し
てあげるから——という言葉が出かかったけど、私はそれを飲み込
む。

「お姉様？」

「いや、何でもない。一応、こっちに来る前から学園のことは調べたり
していたんだけど、しばらくは慣れるために色々と見て回ろうかな。
十傑の席を預けられるくらい有望そうな子を見つけたら声をかけて
おきたいし」

「何かございましたら、私にお声を。力になりますわ」

「ありがと。でも、これは私と爺さんの戦いだし。えりなを巻き込む
つもりはないから」

私は軽くえりなをハグして、部屋を出ようとした。すると、彼女は私の袖を掴んで首を振る。

「まだ、何かあったのかな？ 切なそうな顔しているけど、どうしたんだろう。」

「あ、あの。お姉様……。せ、せつかくですし、今日は昔みたいに一緒に寝ませんか？」

「い、一緒に？ 昔ってまだえりなも私もこんなに小さい時じゃないか。オバケが怖いって……」

私は腰よりも低いくらいの大きさだった時だとジエスチャーするも、目をウルウルさせて頬を赤らめる妹の頼みを断れない。

でも、私も15年前は男だったから流石に今のえりなはちよつと意識しちゃうというか……。

まあ、さすがに実の妹に変な気持ちを起こすほど精神が腐ってはいないと思うけど。

「こうしていると、本当に子供の頃を思い出します。お姉様はいつも達観していて大人っぽくて……」

そりゃあ、私は大人だったときの記憶があったからね。

今はその割に自分はガキっぽいと思っっているけど……。

「改めて、おかえりなさい。もう、離しませんからね」

お互いパジャマに着替えてベッドに横になると彼女は私の右腕に抱きついてくる。

や、柔らかい……。妹よ……。君は良いものばかり食べているから、そんなに発育が良くなったのかい……？

——気になって眠れない。

「えりなはずつとお姉様のことをお慕いしておりました。優しくて、料理人としても一流で、誰よりも努力家で……」

「照れるじゃないか。私には才能がなかった。だから、頑張るしかなかったんだ。えりなのお姉ちゃんとして相応しい人間になるためにね」

「存じてますわ。それが堪らなく嬉しいのです——」

気付けばえりなは私の胸の中でスヤスヤと眠っていた。
気持ち良さそうに寝ているな。とても穏やかな顔で……。

彼女は根っこのところはとても純粋な女の子だ。ただ、才能があつて……あの男に変な洗脳をされたから、他人の痛みにちよつと鈍感なだけなんだ。

えりなのことを血も涙もない酷い人間だと思ふ人もいるかもしれない。

私は姉として彼女の全てに責任を持つし、それから逃げない。
そのために私は遠月の総帥になる――。



「はあ、えりな。噂で聞いたんだけどさ。研究会を潰しまわってるんだって？」

遠月の授業を恙無くこなしながら、学園の情報を仕入れていると、我が妹の悪評を聞きつけた私。

なんでも、えりなは遠月学園に相応しくないと感じた研究会の予算やら何やらを強引にカットしたりして、追い詰めてるようだ。

こんな可愛い顔してえげつないことをしてるなんて。
しかも、本人に悪気がないのが何とも言えない。

「ええ。それがどうかしましたか？」
すました顔でえりなはあっさりとした私の言葉を肯定する。

こりやあ、意見を変えさせるのは骨が折れるぞ。
人間って正しいことをしてると思ってる人ほど頑固になるんだから。

「いや、気に入らないから潰すのって可哀想じゃない？ 食文化は多岐に渡ってる。えりなの価値観が絶対じゃないんだから。この丼物研究会なんて、面白そうじゃないか」

「先に言っておきますが……いくらお姉様の仰ることで、私は手を緩めることはありませんよ。退学にしようとしているわけでは無いのですから。ただ、効率よく学園を運営するために無駄な研究は控え

て貰おうとしているだけです。……もし、覆したくば力尽くで願いたいものですわ。この学園には食戟というシステムがあるのですから」

あー、この目をするときは何言っても聞かない時だ。

やっぱり、意見を曲げさせるのは無理だな。

食戟で覆らせるって言ってもなー。

「ふーん。じゃあ、えりなが井研いごの代表者と食戟したりするのかい？」

えりなと食戟して勝てる子が学園に何人居るか。

海外で私も腕を上げたけど、えりなも昔のままじゃないだろうし

……。勝てるかな……。？ 分からん。

「いえ、私も暇ではありませんので代理の子を向かわせてます」

「代理の子、ね。……。その理屈なら私も井研の代理になれるって訳だ

な？ よーしー！」

「ちよ、ちよつと、お姉様！ 一体、何をお考えに……。!? お待ちくだ

さいー！」

えりなの焦った声を背中に受けながら私は井物研究会へと走って行つた。

姉妹の代理戦争みたいになるだろうけど、これくらいでえりなも私と縁を切ろうとまでは……。多分思わないと思う。怒られるかもだけど。

「先輩、この食戟……。俺に任せてくんねえかな？」

おおっ……。幸平くん、何で井研にいるの？

なんか、食戟する雰囲気になってるけど。

えりなの代理の子って……。水戸郁魅さんか。確か肉のスペシャリストで通称ミートマスター。実家が日本の肉の流通を支配してるとか。

あんな破廉恥な格好してるけど、社長令嬢だ。

まあ、肉料理は強そうだけど……。それ以外のテーマにすれば――。
「なんならそっちの土俵……。肉料理でもいいぜ。俺、勝つし」

あらら、そう煽るか……。水戸さんが肉料理が得意と知ってこの態度。

へえ、やっぱり良いな。幸平くんは……。

この負けん気の強さ。料理人で一番大事なモノを持っている。

しかも、負けたら退学でもオツケーとか言っちゃってるし。

どうやら、水戸さんと幸平くんは肉を使った丼物で勝負するみたいだね……。

「開戦は3日後だ……。——つて、な、薙切玲奈様!?! いつからここに!?!」

「おー、薙切の姉ちゃんならずと居たぞ。食戟の話くらいから」

「ごめん、ごめん。話の腰を折ったら悪いと思ってさ」

シリアスマードだったんで、水戸さんの後ろにずっと立ってたんだよね。

幸平くんは顔色一つ変えなかったけど、井研の部長さんっぽいリーゼントの人とおさげの女の子は割とリアクションしてたなあ。

「な、薙切玲奈……。海外で修行してきて、遠月学園に殴り込みを仕掛けたっていう薙切えりなの双子の姉。似てるから、もしやって思ってたけど。まさか、ここにきて薙切玲奈が食戟をするって言っくんじゃ……。」

「はわわ、薙切さんのお姉さんに食戟なんてされたら勝ち目が完全に無くなっちゃうよ」

「別にいいぜ。俺は薙切の姉ちゃんでも」

「玲奈様!。ここは、私がいりな様から任されております。手出しは——」

あー、本当に悪いことをした。

完璧に邪魔者だな。私は……。

水戸さん、とりあえず落ち着いてくれ。幸平くん、殺気を撒き散らさないで。怖いから。

ええーつと、どうしたもんかな……。こんなにカオスな状況になるとは思わなかったんだけど。

薙切の人間がいきなり来たら驚くか……。

——その時、井研のドアが乱暴に開かれる。

「お姉様！ やっぱりここに居ましたね！ 余計なことは止めて下さい！」

「——っ!?!」

「おー、今度は薙切の妹の方じゃん」

息を切らせながら入ってきたのはえりなだった。

あれ？ この表情はもしかして——。

「え、えりな……。怒ってる？ 怒った顔も可愛いけど……。あはは」「そうやって誤魔化さないでください！ 井物研究会に肩入れしようと企んでいるみたいですが、許しませんからね！」
えりなは私の腕をグイッと引つ張って、この場から立ち去ろうとする。

これは、さっさと退散したほうが良さそうだな……。

「そのつもりだったんだけどね。必要が無くなったから。退学まで賭ける彼の気概を無駄にしたくないし」

「何を訳の分からないことを……。とにかく、帰りますよ……」

「わかったから、そんなに強く引つ張らないで……」

水戸さんたちに呆然と見送られながら私は井物研究会を後にした。
絶対に「何をしに来たんだ？」って思われてるよね。恥ずかしい……。

とりあえず、3日後の幸平くんと水戸さんの食戦を見せてもらおうかな……。



「勝者はなんと！ 幸平創真！」

「お粗末ッ！」

幸平くんが勝ったか。

勝ったのも素晴らしいけど、もっと素晴らしいのは食材にかける費

用を削りに削って審査員の評価を集めたところだ。

安易な考え方だけど、値段の高い食材を使った方が有利だからね。肉の流通を支配してる水戸さんはそれだけで強い。

それを覆しただけでも大したもんだと思う。

——でも、まあ。幸平くんは有望だけど、彼は多分私の元には来ないタイプだろう。勧誘した自分を想像したけど、断られちゃったし。とはいええ、邪魔もするタイプでもないから放っておいて大丈夫かな。

そんなことより、私は——。

「やあ、待たせて済まなかった。水戸郁魅さん」

「玲奈様、何の御用ですか？ 無様に負けた私はえりな様に——」

「ああ、妹が失礼をしたね。私は惜しい勝負だったと思っただけ。幸平くんは確かに見事に勝利したが……それで君が彼に劣っていると思わなかったよ」

私は水戸さんに声をかけて喫茶店で待ち合わせをした。彼女を口説こうと思っ……。

どうやら、彼女は負けた責任を取らされて妹の派閥を追われたらしい。

「慰めの言葉はいいです。3対0で完敗でしたし、幸平の品は実際に美味しかった……」

「どうかな？ 審査員が先に幸平くんのあつさりとした品を食べてたら……、君の品のパンチの強さが引き立って票が割れたかもしれないし、審査員の平均年齢がもつと若ければA5ランク牛肉の素材のパワーだけで票を取れたかもしれない。どっちにしろ、私ならもつと少なめに皿に盛り付けるけどね。高級な肉ってちよつと足りないくらいで丁度いいし」

水戸さんの皿に粗が多かったのは確かだ。

丼物の基本は米と素材の融合……。

強い味同士が反発し合ってクドくなってしまった彼女の品は素材が良くても、それを活かすきれていなかった。

だから、完敗かと言えばそうでもない。

水戸さんの肉の扱いは幸平くんの上を行っていたし、ロティ井自体はかなり満足度の高い品になっている。

ただ、如何せん量が多すぎた。

私たち学生と違って三十歳を超えると途端に内蔵が弱くなってしまい、良い肉ほど少量で満足するようになるのだ。

その上で、ガーリックライスまで使っているから多いと飽きられるのも当然だ。

水戸さんの品の印象はもっと欲しくなるくらいの極めて少量を井として出すだけでかなり変わってきただろう。

そして、食べてもらう順番。

幸平くんは梅肉を使って見事に井という一碗を完結させた。後味をすつきりさせることで、食欲をさらに増大させることに成功したのである。

水戸さんがその幸平くんの皿をも踏み台にすれば――。

彼のシャリアピンステーキ井によって増大した食欲すらも利用して素材の力強さで勝っているロティ井を食べさせることが出来たら、面白い勝負になったかもしれない。

もちろん、勝負にタラレバを入れるなんて無粋なんだけど、私は敗者をこき下ろすようなやり方が嫌いなんだ。

それよりも、こうすれば勝てたとか、運が無かったとか、自分を肯定する要素を見つけた方が前を向けると思っっている。

今回の勝負なんて審査員の年齢によって品の量を咄嗟に変えて、幸平くんの品に注意して出す順番を敢えて遅めにするくらいのアドリブで流れは変えられたかもしれないし、水戸さんの力を一回きりの勝負で見切りをつけるのは勿体ない。

むしろ、これだけ肉に精通した生徒なんて稀有な人材だと思うから、私は彼女に声をかけたのである。

てなわけで、そんな話を噛み砕いて彼女に説明してみたんだけど――

「嬉しいです。幸平の品に負けて清々しい気持ちにもなっていたのですが、やはりえりな様を失望させてしまった惨めさはありましたから」

「幸平くんの品から何かを感じ取れば、負けは無駄じゃないよ。今度はもっと強くなれるはずだからさ」

「あ、あのう。ずっと気になっていたのですが。玲奈様が私を呼び出した理由って何なんですか？」

話が一段落ついて、水戸さんは私に本題を尋ねた。

まずは彼女の心のケアを優先しようと思ってたけど、幸平くんのおかげで思っていたよりもショックも少ないみたいだな。

そろそろ、本題に入ろう——。

「……率直に言おう。水戸郁魅さん……私が手に入れる予定の十傑の席を一つ貰ってくれないか？ 私は君の才能が欲しい」

「玲奈……、様？」

私は十傑評議会の席の過半数を手に入れるつもりである。

でも、私は一人しか居ないから当然席が余るのだ。

だから、信頼のおける料理人に席を預けようと考えて……それが出来る人材をスカウトするつもりでいた。

水戸郁魅さんはその一人目として声をかけたのである。

いい返事が貰えると嬉しいんだけど……。

ていうか、断られたら……めっちゃ恥ずかしいなあ——。

宿泊研修 その1

「十傑の席次を……？ 編入の挨拶で総帥の座を奪うって宣言してたのは本気ってことですか……」

「うん。それは本気だよ。当然、簡単じゃないし。学園にとっては反逆者に等しい存在だから、時が来るまで君はこの話を胸に秘めていれば良い。十傑に相応しい実力までレベルアップはしてもらうけどね」

ミートマスター・水戸郁魅は遠月学園の十傑評議会に入るだけの実力に駆け上がる才能があると見て……私は彼女を勧誘した。

もちろん、おおっぴらに私の同志だと言う必要はない。

祖父はそんなセコい人間ではないだろうが、彼女に何かあつたら迷惑だろうし。

「玲奈様は、私が十傑になれると本気でお思いで？ えりな様のお役に立って負けてしまった私が……」

「思ってるよ。相応の努力はしてもらうが。……一度や二度の負けでその人の価値が決まる訳無いだろう。水戸郁魅、君がいくら自分を卑下しようと君の価値は変わらない。私は君の才能を信じる」

彼女は自信を無くしているけど、それでその人の能力が落ちる訳じゃない。

負けたからとか、そんなのは関係ないんだ。

むしろそういう経験っていうのが、後から大きなパワーアップの鍵になったりするんだから。

負けた相手が幸平くんで良かったとすら思う。

彼の良いところを吸収すれば、彼女はきつと今よりも高いところを翔べるようになる。

「そこまで、私の……ことを。よしっ！ これから私は玲奈様の下に付きます。何なりとご命令を——」

「いや、待ってー！」

「えっ？」

水戸さんは、凄くやる気になった声を出してくれたけど、下に付くとか止めてほしい。

えりなは当然のように女王様をやってるけど、私はそういうの未だに慣れないんだ。

様付けは、止めてと言っても無駄だった。大人に怒られるとか言われて……。

でも、さ。緋沙子ちゃんは家の関係で仕方ないとしても、部下とかそういうのは私には要らないだよ。

「私と君の立場はあくまでも対等の立場。同志なんだから。本当は玲奈って呼び捨てにしたり、タメ口を利いて欲しいくらいだよ。友達みたいな……」

「よ、呼び捨てなんて。水戸家の者が雑切家の令嬢を呼び捨てなんかにしたら、どうなることか……。タメ口なんてもってのほかです」
だよね。そりゃ、そうだ。

幸平くんみたいに家柄とか気にしない子なら全然オツケーって感じなんだけど、この子みたいに食関係の仕事を親がやってるとなると、気を使われるのは当たり前だ。

「じゃあさ。二人きりの時だけでいいよ。人目の無い時だけ頼む」

「そ、それでしたら何とか。れ、玲奈……、こんな感じで良いか？
やっぱ、緊張する……、な」

「おおっ！ 良いじゃん。そんな感じで喋ろう。自然体だし、私も接しやすいよ。水戸さん」

私がマジなトーンで頼み込んだからなのか。水戸さんはリクエストに応えてくれた。

よしよし、帰国して初めて同志というか友達が出来たぞ。

「じゃあさ。玲奈も、私のことを……郁魅って呼んでくれよ」

「わかったよ。これから、よろしくね。郁魅！」

私は郁魅に手を差し出す。

彼女は私の手を握り締めて……恥ずかしそうに微笑んだ。

そうそう、彼女は井研に入ることになったらしい。

肉だけじゃなくて、米とか他の食材との調和を勉強出来るし良い環境だと思う。

私は彼女にいくつかアドバイスを送り、これから先の来たるべき時

に備えてもらおうようにした。



「宿泊研修かあ、楽しみだな。えりなは何か遊ぶもの持ってきた？」

私はトランプやUNOだろ。それに加えて人生ゲームに将棋などボードゲームにも余念が——」

「お姉様！ 旅行に行くのではありません！ あまり、はしやがないで下さい！」

今日から遠月学園の高等部の一年生は宿泊研修だ。

私やえりなも勿論参加する。こうやってバスで移動するのもワクワクするなあ。

「だって、えりなと外泊なんて久しぶりなんだもん。嬉しくってさ」

「そ、それは私もですけど。……と、トランプくらいでしたら、夜にお付き合ひして差し上げます」

嬉しさをストレートに伝えると、えりなも同意してくれた。

何だかんだ言って、料理が絡まなきや素直で可愛い妹だ。

「やったー。緋沙子ちゃんも、一緒にどうだい？」

「はい。私もそれではご一緒させて頂きます」

「表情が固いつて。あー、そうそう。頼んどいた、あれは上手く行つてる？」

「一応、玲奈様のご要望通りに手配はしております。合宿が終わるくらいが頃合いになるかと。しかし、本当にあんなことをされて大丈夫なのですか？」

「ありがと。まー、大丈夫なようにするさ。私もそろそろ本格的に動かないと。口だけみたいに思われるからね」

緋沙子ちゃんに頼んでおいたアレは予定通りに進んでいるみたいだね。

十傑の過半数取るとか大言壮語を吐いて、何もしてないんじや締まらないし、夏までには一つくらい席を貰つとこうと思つて動いている。

やっぱり緋沙子ちゃんは頼りになるな。

えりなが信頼してる数少ない人物だけある。

料理の実力も申し分ないし、タイミングを見て口説こう……。

「また悪巧みですか？ お姉様」

「イヤだなあ。暗躍と言ってくれよ。その方が格好いいでしょ？」

ねえ、緋沙子ちゃん」

「うええっ？ わ、私にここで振りますか？ えりな様、玲奈様は

……、そのう」

「緋沙子、あなたがしつかりと玲奈お姉様が変なことをしないか見張ってなさい。分かりましたね？」

「は、はい。分かりました……」

えりなは緋沙子ちゃんが困った顔をしたので、話の詳細を聞くのは止めて……私を見張るように念押しした。

緋沙子ちゃんに見張られたところでなあ……。

まあ、彼女がえりなに怒られないように配慮するつもりだけど。

「お姉様も宿泊研修に集中してください。もちろん、課題で躓くはずはないとは思ってますが」

「退学はシャレにならないもんね。とりあえず、せつかく同級生とひとつ屋根の下で生活するんだ。有望そうな子を見極めようつと」

「ということは、既に目をつけてらっしゃる方が居るのですか？」

「んー、一応ね。生憎、私に付いて来そうにないタイプの子ばかりだけだよ」

授業を見たり、食戟してるのを見たり、雑切の人脈を使って情報を仕入れたりして、同級生のデータを整理することで何人かピックアップしたけど、どうも全員クセが強い。

そりゃ、才能もあって負けん気の強い子ばかりだから当然なんだから。

声をかけてみようとは思うけど、すぐに同志となってくれる気配は無さそうなんだよね。

「それはそうでしょう。お姉様のやろうとされていることは遠月学園へ

の反逆と捉えられてもおかしくないのですから」

「だよ。まー、頑張つて口説き落とすき。ナンパは苦手なんだけど」
私たちを乗せたバスは遠月リゾートへと到着した。

うわあ、久しぶりだけど高級ホテルやら旅館やら凄いなあ。

こりゃ、楽しめそう。リゾート気分を満喫するっていうのをき。

宿泊研修は5泊6日の日程で執り行われ、課題をこなす。

特徴的なのは、ゲスト講師として卒業生が招かれているってこと。

つまり、我が校の誇るスパルタ競争を勝ち上がった上澄みの中の上澄みである料理人たちが指導してくれるのだ。

そんな講師の紹介をしている最中に香料の入ってる整髪料を使つてた子が退学になった。

まー、確かに感心は出来ないけど……こういう所なんだよね。私が嫌いなのは。

失敗した人間を絶対に許さないっていうのがなー。

そりゃ、緊張感の中でしか生まれない何かがあると思うし、何度言つても聞かないのなら見込みが無いと思われて当然だと思うけど。

しかし、その退学を口にしたゲスト講師——四宮シェフは気になるな。

私らみたいなガキを相手にするのが面倒なのは分かるが……表情や仕草から想像すると余裕の無さが感じられる。

あの苛つきもそんな彼の心理状態から出ているのかな……。

この人、おそらく多くの生徒を退学にするぞ。それもわざとそうなるように仕向けるくらいはしそうだから……気を付けないとな。

どうも、この研修中は我々は彼らの従業員扱いらしい。使えなきや退学クビなんだってき。

とんだブラックな職場だな。このくらいは予想してたけどね……。

さて、最初の課題は——。

「一学期の最初の授業と同じ人とペアになつてくださ〜い」
乾シェフの指示で私たちは課題に取り組む。

どうやら、最初の課題はこの周辺の私有地から各自で食材を見つけ
て日本料理のメインとなる一品を完成させることみたい。

完成というのは当然、乾シェフから合格を貰うってことなんだけ
ど。

さらに、制限時間は二時間だと言われた。

幸平くんも同じ課題か。……おや、誰かと揉めてるなあ。

ふむ。あの金髪の男の子はタクミ・アルディーニくんだね。彼もま
た目をつけてた子だ。

双子の弟と共にイタリアの厨房という現場の経験を活かして非常
に良い成績を収めている才能が豊かで有望な人間。

後で声をかけておこう。女の色気で何とか出来ね〜かなとか思っ
たけど、あつちはイタリア育ちだもんな。

女の子の扱い上手そう……。ちよつと前までイタリアに住んでた
からよく分かる。

彼らはお婆さんになつてもレディとして扱ってくれるんだ。私の
無いに等しい色気なんて通じない。

それにしても……なんで、幸平くんに絡んでいるんだろう。

「あちやー、幸平の奴……また何か揉めてるし。玲奈っち、また一緒に
頑張ろうね」

「ああ、よろしく。吉野さん……。ていうか、吉野さんつて幸平くんと
親しいのかい？」

今回、私とペアを組むのは吉野悠姫さん。

この学校での一回目の授業で打ち解けた、非常にフレンドリーな子
だ。

あだ名で呼んでくれるなんて嬉しい。

彼女は幸平くんのこと知っているみたいだけど……。

「幸平と？ そうだね。あいつとは同じ寮に住んでるから。それなり

に……」

あー、そつか。彼も彼女も極星寮に住んでたね。うっかりしてた。我が校で自治みたいなのが認められている数少ない施設——極星寮。

なんでも、黄金期という時分には十傑が多く在籍しており、その時に勝ち取った権利らしい。

今は第七席の一色先輩が住んでいるよね。私が十傑の中でも読めないという点で最も警戒している男の一人だ。

「幸平がどうかしたの?」

「いや、何でもない。それより、今回の課題はジビエ料理が得意な君に有利なお題だと見受けられるが……何か妙案はあるかな?」

「あれ……? 玲奈つちにジビエのこと話したっけ? まっいいか。そうだね、こういう所だったら——」

一年生の成績上位者の情報は一通り頭に入ってるからね。

吉野さんの情報も仕入れている。何でも寮の一室で野生動物を飼育してるとか。

それだけに素材への扱い方も長けているし、知識もかなりのものだ。この課題に最も適した人材だろう。

「吉野さんとペアを組んでラッキーだったよ」

「玲奈つちこそ、私の狙いを読み取ってあんなソースを作るとは思わなかった」

「薙切玲奈、吉野悠姫。合格とします」

「「いえーい!」」

私と吉野さんはハイタッチしてお互いに合格を喜ぶ。

組んだのが彼女じゃなかったらもっと時間がかかったかもなあ……。

「おいおい、もう合格しちゃったぞ。あの二人……」

「まだ開始して一時間経ってないのに」

「ウサギなんてどうやって捕まえたんだよ……」

そう、私たちは野うさぎを捕まえてメインの食材とした。

ていうか、吉野さんがすごいスピードで狩りに成功する。

彼女が野うさぎを解体するのをフォローしつつ、私はオリジナルソースを作った。

「野うさぎを串焼きにして、それに味噌ヨーグルトソースをかける。野性味溢れるジビエの匂いを見事に消して、さっぱりとしてそれでいて濃厚な味付けを演出するとはお見事です」

吉野さんが野うさぎを捕まえてくれたので、私は乳牛から搾りたてのミルクをゲットしてヨーグルトを作り……味噌仕立てのソースを作った。

二人で作った【野うさぎの串焼き・味噌ヨーグルトソースを添えて】は好評価を得て、私たちは合格ペア第一号となったのである。

「君は難切玲奈さんか。和食にトルコ料理のエッセンスを融合させるとはやるじゃないか。やれやれ、僕らが最初の合格者になるつもりだったのに……」

「タクミ・アルディーニくん……か。そっちの合鴨の香り焼き——良い出来だよ。特にその鮎の塩辛うるかを使った和風サルサ・ヴェルデは、最高のアクセントだ。さすがはイタリアの厨房でプロとしてやっていただけはある。イタリアンを和食に見事に融合させているね」

私たちの審査が終わった頃、ちょうどアルディーニ兄弟が品を持ってきていた。

彼らも短時間ではっちり仕上げてきたみたいだ。やっぱり、彼ら……特にタクミくんの方はいい腕をしている。

「……一瞥しただけで、この料理のすべてを見抜いた？」

「大して役に立たない特技だよ。良いものを見せてもらった。ありがとう」

調理とか色々としながら、ばっちりタクミくんたちの観察もしていたから、厳密に言えば一瞥しただけで味を読み取ったわけじゃない。

その方が格好いいから、否定はしないけど……。

当然、タクミくんたちは合格した。

そして、かなり遅れて幸平くんたちも合格する。

まさか、乾シエフのおやつ柿の種を奪って揚げ物の衣を作るなんて思わなかったな！。

「なあ、薙切の姉ちゃん。お前、見ただけで味が分かるんだろ？俺とあいつの品、どっちが美味いか審査してくれよ」

「乾シエフが逃げてしまったからな。勝負を預かると言っていたが、いつになるのか分からん。君の判定なら納得できる」

「えっ？なんで私が？嫌だよ、どちらかが傷付くなんて見たくないし」

乾シエフったら、幸平くんとタクミくんの品をどっちが美味いか判定するって言うっておきながら、移動時間が迫っていることを理由に逃げ出した。

それで、帰りのバスで後ろの席になった二人が私に向かって無茶ぶりをする。

てか、彼女が言うとおりの両方とも甲乙つけがたいし、明確な差なんて特になんないけど。

「どっちかが傷付くってことは、薙切の中ではどっちの品が美味いかどうか決まってるってことだろ？」

「そ、そういえばそうだな。教えてくれ。俺もそれでスッキリしたい」「うーん。でも、独断に満ち溢れているし、きつと納得出来ないと思うよ」

「いいから言ってくれ！」

怖いよ〜。私、一応……女の子なんだぞ。

本当に文句言わないでくれよ。

怒ったりしたら、泣くからな……。

「私はタクミくんの品が美味しいと思ったよ」

「えー！薙切の姉ちゃん、そりゃねーぜ」

「よしっ！ 幸平！ 判定にケチをつけるとは男らしくないぞ！」

「理由は私が柿の種が好きじゃないから。以上」

「へっ？」

案の定、幸平くんは不満顔をして、タクミくんは喜び……私が理由を話したら二人とも固まった。

「結局、味の好みなんて人それぞれだからね。唯一無二の絶対的な味覚がある人間なんて妹のえりなくらいなんだから」

食戟の審査員だって偏食って人間は少ないだろうけど、一人ひとり味覚は違う。

濃い味が好みだったり、薄い味が好みだったりするだろう。

審査員の数を増やせば平等に近づけることは出来るけど、一人の人間が同じくらいの出来の品の甲乙をつけるなら、最終的には好みの問題になるに決まっている。

どっちが美味しいか……その答えを出せと言うならば。

「ちなみにこれが食戟だったとして、審査員が若い女性ならば……タクミくんの勝率は77パーセントくらいかな。逆に壮年の男性であれば幸平くんの勝率が86パーセントくらいになると思うよ」

「……………」

「そもそも、君らだって客商売してたんだから、お客さんがみんな同じメニューが好きってわけじゃないことくらい知ってるだろ？ 勝負に熱を上げるのは結構だがお互いに認め合いなよ。どっちにも良いところがあるんだからさ」

ここまで早口で言い切って、私は仮眠を取ろうとアイマスクをつける。

ちよつと今夜に野暮用が出来たのだ。

まったく、動くのは宿泊研修の後だと思ったんだけどね。



「夜に女一人を呼び出すなんて、紳士のすることじゃあないね」

「意外だぜ。一人でここに来るとはな。あの人からの伝言を伝えに来た——」

宿泊施設からこっそりと抜け出して、人目につかない待ち合わせ場所に向かった私に大柄なドレッドヘアの男が話しかけた。

彼の名は美作昂くん。遠月学園の十傑評議会……第九席である叡山先輩からの刺客だ。

そう、私は手始めに叡山先輩の席次を貰おうと動いていたのだ……。

仕掛けて来るのもうちよつと遅いと読んでたんだけど、どうしたもんかなあ——。

パーフェクトトレース

私を呼び出した美作昂くんはその凶悪そうな厳つい顔を近付けてニヤリと笑った。

伝言って言っていたけどやる気満々じゃないか。合宿中では食戦も出来ないと言うのに。

だからこそ、仕掛けてくるなら合宿の後だと思っていた。叡山先輩が美作くんをけしかけることくらいは読んでいたが。

「お前、叡山先輩のプロデュースした店のライバル店の業績を悉く上げて回っているらしいじゃねーか。薙切の一族だからって無事で済むと思ってるのか？」

そう、私はずっと叡山先輩の縄張りを荒らしていた。

彼のプロデュースした店のライバル店に無償でアドバイスしたり、ときには無利息で融資したりしていたのである。

地道な活動のおかげで叡山プロデュースの店は悉く業績悪化。

彼は私が喧嘩を売っていることに気付き、美作くんを使って私の妨害を止めようとしたのだろう。

「叡山先輩には悪いことをしていると思っている」

「ほう……」

「でも、どう考えてもさ。一番簡単そうだったんだよね。十傑の称号を頂くにあたって。叡山先輩が」

「はっ！ 随分と見縊っているじゃねえか。あの人なら勝てるってか!?! 食戦で！ 悪いがお前みたいな新参者、おれにだって敵わねえよ！」

へえ、意外だな。叡山先輩、慕われているんだ。

美作くんはスキあらば叡山先輩の首を狙っていると思っていたけど。

私の見立てでは美作くんのポテンシャルは叡山先輩よりも上だし。

「一つだけ訂正させてもらおうよ」

「訂正だと？」

「叡山先輩になら勝てるじゃない。叡山先輩にも勝てるだ。私は十傑

の過半数を頂くつもりなんだから」

最初に叡山先輩の首を狙ったのは一番簡単に勝負の土俵に上がってくれそうだったからだ。

別に簡単に勝負を受けてくれるなら、ほとんど誰でも関係なかった。

唯一、司先輩だけ未知数なところがあるから勝てるかどうか微妙なところだが、他の人たちなら負けな自信はある。それだけの訓練を積んでいたから……。

「ははははは、幸平にしろ、お前にしろ、転入生共は大言壮語を吐くじゃねえか！ とにかく、忠告したぞ。退学したくなかったら、叡山先輩に従え！」

なんだ……。忠告だけなのか。

リアルファイトするとか、もっと喧嘩を売ってくると思ったんだけど。

「なんだ、せっかく女の子を呼び出しておいて忠告するだけなのかい？ つまらないな」

「食戟が出来りゃあ、お前の誇りも全部奪ってやったんだけどな。こじゃあ無理だろ？」

ふむ。そういうもんなのか。

遠月では食戟は絶対。食戟以外の勝負方法は思い付かないのかもな。

まあいいや。叡山先輩は刺客として彼を送ったんだろうけど私も彼に用事があったんだよね。

「そうかい？ じゃあ言い方を変えよう。美作昴、君は今から私の仲間になれ。そうすれば、叡山先輩の椅子をくれてやってもいい」

「はあ？ 何を言い出すと思えば、この俺を仲間にだど？ 転入生の分際で。冗談でも笑えねえぞ」

「私は冗談も好きだけど、冗談ならもっと面白いことを言うよ。パーフェクトトレースだっけ？ 君は良い資質を持っている。叡山先輩の下にいるのは勿体ない」

美作昴の必殺技はパーフェクトトレース。

相手の情報を徹底的に集めて相手の作る料理を予測し、その一歩先のアレンジを加えて勝ちに至るといふ食戟特化と言っても良い力だ。これから私も何度も食戟とやらをすることになるだろうけど、生憎、私の手は二本しかない。効率よく勢力を広げるには仲間が必要だ。

食戟において、美作昴は一年生の中でもトップクラスだと私は評価している。彼に容易に勝てるのは、すぐには用意できないバカ高い調理器具を取り揃えて料理する従姉妹のアリスくらいだろう。

それだけに欲しい。美作昴という才能が。

彼はまだまだ上にいけるし、今のままで満足しているとその才能を腐らせることにもなる。

「パーフェクトトレースのこと、知っているのか？」

「顔付きが変わったね。君ほどじゃあないけど私も情報収集には余念がないんだ。この学園を頂くために」

「……ちっ！ 分かったよ。そんなに言うなら合宿終わったら食戟してやるよ。俺を負かしたら、お前の下でも何でもついてやる。その代わり、お前が負けたら俺の下に付け」

おお、負けたら仲間になつてくれる確約くれたぞ。

でもなー、合宿終わったら、終わったでやること多いし、美作くんで時間を潰したくないんだよね。

「せっかくなんだ。合宿終わりとわずに、今から勝負しようよ。ここは雑切が経営しているホテルだからね。私が言えば調理場を借りることくらいできる」

「バカか？ お前は。食戟には審査員がいるだろうが。流石にそれは用意できないだろ？」

「審査員なんていらないよ。要するに君と私の優劣が付けばいいんだろ？ お互い食べあつて美味しいと思つた方に投票する。2票ゲツトした方が勝ち」

私は勝負の方法を提案した。

審査員なら私たちがすれば良い。相手に自分の料理よりも美味しいと思わせる料理を作れば勝ちってわけ。

自ら審査しているのだから、審査結果に不満も出ないだろう。

「ほう。つまりお前は俺に俺の料理よりも美味しいと言わせる自信があるって訳だな」

「もちろん。それに君が自分の舌には嘘は吐かないと信じている。審査方法は私が決めたから。メインの食材やテーマは君が決めるといい」

美作くんが意地を張って負けを認めないということはそもそも考えない。

料理人っていうのは素直なもので、美味しいものを「不味いわよ」などと断ずることは少ないのだ。

我が妹はまあ、色々と歪んだ教育を受けちゃったから、あれなんだけど。

「くつくくつ、はーっはっはっはっ！ 残念だったな！ 薙切玲奈！ お前は俺を勝負の土俵に引きずり込んだつもりだろうが！ 俺のパーフェクトトレースはこの展開を読んでいた！」

「へえ、それはすごい。君の力は野良良試合じゃ使えないと思っていたけど」

「薙切玲奈、中国、インド、トルコ、フランス、イタリアに留学して料理修行を積んだ料理人！ 得意は様々な国の料理を組み合わせるフュージョン料理！ お前のことは調査済みだ！ その性格も！

既に水戸郁魅を自分の派閥に入れていることも！」

なるほど、私の個人情報を入れて勝負を投げかけることまで読んでいたんだ。参ったな、まさか郁魅のことも知っているとはい。

すごいなー。ストーリーカーされたとか考えるとおぞましいけど、転入したての私のデータをこれだけ揃えたのは大したもんだ。

「俺はすでに何を作るのか準備もしているし、テーマも食材も決めてあるんだよ！ お前は勝負を挑んだんじゃない！ 俺に勝負を挑まされたんだ！」

「あー、予め準備をしたんだ。なるほど、君の準備してきた料理に対して私は即興料理で挑まなきゃならないと、そういうことだね？」

どうやら私がどんな勝負を挑むのかも、テーマや食材を決めさせる

ことも読んでいたらしい。

これは予想を超えてきたな。すっかり騙されたよ。

美作昂は侮れない男だということか。

「そのとおり！ 即興料理はどう頑張っても、その場のインスピレーションに任せて料理を組み立てることになる！ 聞こえはいいがそれは思考停止に他ならない！ 料理つてのは微に入り細を穿ち準備し抜いた方が勝つんだよ！」

「ふむ。一理あるかもね」

「その場しのぎの料理に負けるほど俺は弱くない！ パーフェクトトレースをただアレンジを加えるだけの能力だと侮ったことを後悔するんだな！」

上機嫌そうに笑いながら美作くんは勝利を確信したような顔付きになる。

パーフェクトトレースは相手の料理に合わせてアレンジを加える能力だけでも十分に強力だと思ったけどな。

やっぱり彼は欲しい。この学園を手に入れるために必要な人材だ。「特別に選ばせてやろう！ 今から負けるか。それとも後日、食戟で負けるか。まあ、今日戦ってもお前の鼻っ柱を折ることしか出来ねえから、後日でも——」

「いいよ。今からやろう。得意なんだ即興料理。だからこそ、君にこの勝負を挑んだ」

とはいえ、このまま引き下がったら格好悪い。

美作くんは絶対に必要な人材だし、勝つしかないだろう。

私は美作くんに勝負を挑んだ。それを彼が受けるというのだから、こんなにありがたい話はないではないか。

「そうか、今ここで負けることが望みか。ならば、テーマは洋食！ メインの食材は牛肉つてのはどうだ!? 制限時間は二時間だ!?」

「了解した。じゃあ、厨房に行こうか。君は準備した食材があるなら持ってくるといい。必要な食材はこのホテルで調達する、で良いかな?」

「ああ、構わねえぜ」

こうして私と美作くんの非公式の野試合が始まった。

私は美作くんが予め考えて準備した料理に即興料理で挑む。さて、どうなることやら。

美作くんを引き連れて調理場へと向かう私。

テーマは洋食で牛肉を使った料理か……。彼は何を作るのだろう……。

「ちよつと前にな。野暮用で高級洋食チェーン店の御曹司を潰したことがあつてな。今から作るのはその品だ」

美作くんは調理場に着くなり、材料を次々と準備する。彼が用意したという品はまだクーラーボックスの中にあるみたいだけど。

ふーん。なるほどね……。

「へえ、ビーフシチューを作るのか。テール肉を白味噌仕立てにして、まろやかさを演出。一口食べると極上のとろみが舌を支配するだろうね」

「——っ!? お前、食戟を見てやがったのか!?!」

「いや、ちよつと想像しただけだよ。食材を見れば、大体分かる。どのくらいの美味しさになるのかも、ね。私のことはよく知っているんだろう?」

私は美作くんがどんなビーフシチューを作ろうとしているのかまで見抜くと、彼は初めて狼狽えた表情を見せた。

そういえば、食材だけ見て何を作るのか、まで想像したのは日本に帰ってきて初めてだったかな。

「ふつ、お前が想像力とやらを自慢しているのは知っている。だが、何を作るのか知ったとて、俺には及ばない! 俺には切り札がある!

あの日、勝利を決定づけたこれが!」

「付け合せは特製ベーコンか……。熟成・塩漬けに5日間、風にさらし丸1日かけて乾燥させ5時間もの間燻し続けた、つてどこかな? 手間暇かけただけあつて最高のアクセントになるだろう」

「分かっているのなら、理解出来ただろう! 時間と手間、その重さ!

即興調理とは対極とも言える強みがこの皿にはある!」

よく分かっている。基本的に時間をかけた方が有利だよね。手間暇かけたものが美味しいのは必然だ。

さて、どうしようかな。この品に勝つには――。

「……………」

「どうした!?! 目を瞑って、黙り込んで! 怖気づいたか!?!」

「勝率、65%……、勝率77%……」

「何を言ってるやがる!?!」

「勝率、92%……、勝率……100%」

何を作るのか、は決まった。これなら間違いなく勝てる。

目をつむって、頭の中でレシピを練り込んだ私は美作くんには勝つための料理を考えついて目を開いた。

「私は才能がなくてね。鍋を振る時間を一秒でも増やしたかった。イメージの世界での調理時間は現実を超越する。集中さえすれば、何十通り、何百通りと試行錯誤して最高の一皿に突き進むことが出来るのさ!」

「訳の分かんねえことを言うな!」

「美作昂くん。君のパーフェクトトレースの天敵が私だ。頭の中までは観察できないだろう? 既にレシピは完成して、十回ほど調理のイメージトレーニングを終了させたところだ。君に魅せてあげるよ。私のビーフシチューを!」

想像による培われた味覚センサーによって可能にしたのは超高速のイメージトレーニング。

味を想像したその先は無数にある料理工程を系統化して、洗練された味を創造すること。

即興料理が得意なのは事実だ。何故ならレシピを創り出すスピードだけは誰にも負けない自信があるから……。

「ビーフシチューだ?!? まさか、メニューまで俺に被せてきやがるとは! だ、だが、そんなコケ脅して俺は自らの調理を失敗などしない!」

私と美作くんはお互いにビーフシチューを作った。

想像どおりの美味しさならこれで勝てるはずだ――。



「このテール肉は本当に絶品だね。ベーコンもビシツと頭に響くくらい良いアクセントを出している。想像したとおり美味しいよ。美作くん」

「……ば、バカな。だって、俺はさつき提案したんだぞ。ビーフシチューを作ることだって、こいつは食材を準備するまで知らなかったはずなのに……！ どうやったら、これだけ一口目から鮮烈で、それでいて斬新な調理が」

美作くんは私の作ったビーフシチューを食べて膝をついていた。

自信喪失までさせるつもりでは無かったが、彼を仲間に引き込むにはそれ相応の力を示さなくてはならないと思ったので、私も特技を披露せざる得なかったし、真剣にやらざる得なかったのだ。

「ビールを仕入れた時には血迷ったかと思ったが、肉がそれによって二時間の調理ではあり得ない程の柔らかさになってやがる」

「フランス北部ではポピュラーなやり方さ。ワインが作れない代わりにビールを使って煮込む料理が発達したんだ。ルーをザラメで繋いで、タマネギの甘みとビールの苦味を融合させると恐ろしいほど鮮烈で牛肉の柔らかさが引き立つ豊かな味になるんだ」

高速のイメージトレーニングの土台になっているのは、海外留学での経験値。

世界中の料理と触れ合って、努力を研鑽し続けた結果としてこの力を身に着けたのである。

雍切えりなは天才だ。その天才性に追いつくために私は血反吐を吐きながら凡人の壁を突き破る方法を模索していた。

えりなを守るため。えりなと料理人であることの喜びを分かち合うために。

私は彼女に並び立つための力を手にする必要があった。

神の舌に追いつくために私はここまで想像力を鍛えたのである。

「美作くん、君が自分のビーフシチューに投票するならば、勝負は引き分け。後日の食戟に持ち越そうじゃないか。君がこの試合のジャッジを下してくれ」

私は無論、自分に投票した。美作くんのビーフシチューも美味かつたし、十分に称賛に値する味だったが、彼の料理には決定的な弱点があった。

今のままでは十傑に勝つにはちよつと力不足かもしれない。それを知っているから叡山先輩の下に甘んじているのかもしれないが……。

「……持ち越したと!? バカ言え、衆人の見ている前で負けると分かっている勝負をするアホがどこにいる。俺の負けだ……。このビーフシチューはお前じゃないと創れない味がする。よく分かんねえけど。俺が同じレシピで作ってもこの味にはならねえ気がするんだ……」

「必殺料理の領域には模倣じゃ時には辿り着かない境地がある。それが分かっているだけでも君は非凡な料理人だ。私と共に歩めば君はさらに上に行ける」

「す、必殺料理……」

「付いてこい、美作昂。付いてくれば約束どおり、十傑の席をくれてやる」

素直に負けを認めてくれた美作くんに私は手を差し伸べた。

食べるだけで料理人の顔が浮かぶという必殺料理^{スベシヤリテ}。

私はそれに至る資質のある料理人に声をかけている。

水戸郁魅と美作昂を勧誘したのはそういう訳だ。

十傑の席に相応しい料理人になる未来を見越しているのである……。

「ちつ、仕方ねえ。叡山先輩を裏切るのは気が重いが、約束しちまつたしな。お前が頂点を取るのに尽力してやるよ。誰でも好きなやつをストーリーカーしてやるぜ」

「ストーリーカーか。ええーつと、うん。ストーリーカーねえ。そうだな、それはまた考えとくよ。とりあえず合宿頑張つてね」

こうして私はストーリーカー、じゃなかった美作昂くんという心強い仲間を手に入れた。

まだ合宿は始まったばかり。これから他の有望な一年生に声をか

けるとしよう。

じゃあ、そろそろ私も部屋に戻るとするか。

「玲奈お姉様！ どこに行っていましたの!? えりながどれほど心配して待っていたと思っっています!?! もう少して警察を呼ぶところでしたよ!」

「えっ? えへへ、警察? ぐ、ごめん……!」

深夜に部屋に戻ったらカンカンに怒っている妹に叱られた。

えっと、怒っている顔も可愛いんだけど。それ言ったらもつと怒られるし……。

今度から深夜にこっそり料理勝負するのは自重しよつと……。